

他に誰もいない診療所の一室で鷹野が後ろから足音を殺して近づき、冷たい腕を梨花の両肩へ絡めてくるのは、いつものことだった。梨花は小さくため息をついた。

「驚かないの？」

鷹野は不満げに言った。仕方なく答えてやる。

「わあすごいびっくりですーぜんぜんきがつかなかったのですーたかのはほんとうにすごいのですさいこーばちばちばち」

「……棒読みもそこまで来ると嫌みを通り越して自然ね」

「ほめられてとつてもうれしーのですーわあいわあいすごいうれしーたかのもすごいですよー」

「同じ技二回使うのは禁止よ」

小さく鼻で笑われて、梨花はびたりと口を閉じた。これ以上、道化を演じる気はなかった。

雨の診療所の中、蛍光灯が細かくふるえ。

断続する景観の中、風の音がむやみに踊り。

揺れ続ける音声の中、夕闇も混沌な灰色。

曖昧に蕩ける誰そ彼の中、二人で向き合う。

「ねえ、」

鷹野の方から言い始めたことだった。

「退屈じゃない？」

「ボクも、です」

互いに気安い笑みを浮かべることなしに、いつもの通りの遊戯が始まった。始まりは呼吸。耳元へ向けてささやかれる息吹の温度ですら、欲情の度合いを伝える道具となる。唇から紡ぎ出される言葉ですら呼吸の一種でしかなくなってしまう。

耳元で吐き出されるごくわずかな風圧がそのまま幾億倍もの痛烈な威圧となって、梨花の心の襲へ噛み付いてくる。

思い切り体当たりを仕掛ける。ベッドの上に押し倒して、鷹野の両手をつかんで封じ込める。

鷹野は余裕の笑みを浮かべて言った。

「重くなつたね」

「育ち盛りなのです」

いささか感情を害される。けれど鷹野はそんなつもりで言ったのではなさそうだった。

「なんだか嬉しいわ。ちゃんとごはん食べてるんだって、思ってたね」

「沙都子のごはんが美味しいのが悪いのです。ボクだって太りたいわけじゃない」

「幸せ太りだね」

組み敷かれていのに、鷹野の表情は余裕だし、声だって焦った様子は欠片もない。そのことが梨花は悔しい。もつと嫉妬したり、悔しがったり、焦ったりすればいいのに。

考えるのと服を脱がせるのは同時だ。シャツのボタンだけは丁寧に外していく。自分の服は脱がない。面倒くさい。彼女の肌に顔を埋め、指先で触れて、それだけで暖かみは知れる。それ以上の接触は必要ない。

鷹野の柔らかな肉にただ指を這わせた。彼女は声を上げない。ただかすかな吐息をもらすだけだ。どうにか声を上げさせて、わざと焦らすように肌の上に指を置く。彼女のかすかな身じろぎ、呼吸、寄せた眉根の動き、それら全てに神経を集

中させて、彼女が何をどんな風に感じているのかわかるようにする。願わくば彼女と同じものとなるようにと思いつながら、どこをどうすれば彼女が気持ちよくなるのかに神経の全てを捧げる。間違っても、鷹野に気持ちいい？なんて下世話なことを訊きたくはない。そんなことは自分のプライドが許さない。そう訊くこと自体が自信のないことの表れのようにすら感じてしまう。だから彼女の肌へ触れている瞬間、口を開くことは少なかった。ソコはソコで忙しいから、言葉を発するような暇がないというのもあるのだが。

梨花は彼女の指先をくわえる。中指の先に塗られたマニキュアは化学薬品の匂いがある。くちづけ、舐め、ゆつくりとくわえこんで、舌を絡ませ、喉奥へと導くことに鼻奥へわずかな刺激臭が漂う。ちゅぷ、と口腔で動かす。粘膜をこすりつけるように首ごと上下させる。あるいは先の方だけにちろちろと舌を踊らせる。唇を湿して、一気に吸い付く。思いつく限りのことをした。

指先に飽きると、肘へ向けてすうっと撫でるように舐める。ゆつくりと蒸散していく唾液を追いかけられるように、もう一度。柔らかく白い肌へ舌先を走らせる。噛み痕をつけたくなるのを抑えて、小さく吸うにとどめる。肘から肩口へ、そして鎖骨へ唇を這わせている間、鷹野の息が少しづつ上がっていくのを梨花は聞き逃さない。猫がミルクを舐めるときのように激しく舌先を動かした。

「く、あ、ふっ……」

痩せた女の鎖骨のくぼみの、柔らかなところに

尖らせた舌を突き刺すように力を込めて舐める。丹念に汗と唾液がくぼみに溜まるほどになめらかに強く。触れた部分から唾液に溶けていく熱が彼女の肌の上に塗りつけられていく。

唇へ頬ををすりよせて、口づけようとして、不意に物音と視線に気がつく。大きい、けれど梨花にしか気付けない物音。

目をあげるとすぐ、羽入がいた。

こちらをのぞき込むその瞳はかすかに潤んでいる。けれど唇をそっと結んだまま何も言わない。

また物音。羽入の足が、だん、と床を踏みならしたのだ。彼女は目に涙を浮かべたまま、何も言わない。抗議のつもりなのだろう、鷹野を抱くことに關しての。

梨花の感覚と羽入の感覚はつながっている。ナメクジの交尾のようにねっとり全身を絡ませ合う感覚が気にくわないのなら、そう口で言えばいいのに、羽入は一言も発さずにこちらをただ泣きそうな目で見ているだけだった。甘えているのだ。言わずとも分かってくれるなんて、そんなのは甘えでしかない。梨花はそう断じて、こちらから話しかける気を無くした。

ただにらみ合う梨花たちの間で、目を閉じたままの鷹野のかすかなあえぎ声だけが響いている。

もつれ合った互いの長い髪の毛が軋む。汗で張り付いた肌がべたつく。今まで気がつかなかったいろいろな嫌なことに気がつき始める。壁一つ隔てた向こうの物音や道を通り過ぎる車の音、些細な気配に不快感を感じる。自分と誰かが溶けあ

感覚が消えて、現実が戻ってくる。

音もなく、羽入の唇がうごいた。

どくん。心臓の鼓動が頭の中に響いた。

それを打ち消すように、梨花の方から視線を外す。見られていることを忘れられない。けれど梨花は羽入を無視する。見られることを受け入れれない。再び鷹野と二人だけの世界に入り込もうとする。肌の上に降りかかる黒髪をかき上げてもすぐに落ちてしまつて、しっとり潤い火照った鷹野の胸の谷間に張り付く。

身を起こして自分から服を脱ぐ。シャツのボタンを性急に外し、下着を脱ぐ。子供っぽい白いパンツには、鷹野のような欲情の徴がない。子供だから、欲情を知らないから、愛液もない。梨花が鷹野の喘いでいる姿を見て楽しいのは、多分、ただの優越感。これは恋情などではない。心など渡したりはしない。ただの遊びだ。

指先を鷹野の腰のあたりへ滑らせた。豊かに整った茂みは雨上がりのように濡れていた。熔けたように熱く濡れたところへ中指を挿れる。何の抵抗もなく滑るように入る。

「あ……」

吐息がひととき大きくなる。汗で滑りそうになる腰骨をつかんで、前後に動かした。小さな細い子供の指には、大人の腰が押さえられない。独りでに暴れる腰を押さえつけようとして、体重を掛けて、奥底まで指を突っ込んだ。

「ふあ、ああああ……！」

鷹野の嬌声が鼓膜に響く。目を閉じて、蠕動する粘膜の感触を感じ取る。

——梨花。

まぶたの裏に残っている、羽入の唇の残像がささやく。

本当は聞こえていた。

——梨花、聞いて。

羽入は警告してくれていた。

——その女は、良くない。

「どうしたの」

鷹野の声に、目を開ける。激しく動かしていたはずの指が止まっていた。

「……何でもないのです」

梨花はそっと首を振って、鷹野の柔らかな乳房に頭を埋めた。ゆつくりと指を抜くと、ふやけているのが分かった。

「おじいちゃんの指みたいですよ」

梨花はそう言つて、鷹野の前に濡れた指を突きつけた。彼女は嫌そうな顔をして、目をそらした。その顔が面白くて、梨花は小さく笑う。

「えっちな鷹野も、可愛かったですよ」

とどめを刺すようにささやくのも忘れない。かすかに赤らんだ鷹野の頬へ唇を寄せる。

だん、だん。

物音が煩い。それは警告音だ。けれど止めることに意味を感じない。

梨花はゆつくりと身を起こして、服を着始めた。

「鷹野、そろそろ起きないといけないですよ？」  
梨花は物憂げに寝転んだ女に呼び掛ける。

「もうじき午後の診療が始まるのです。子供に遊ばれている暇はない」

「……誰が、子供よ」

そんな指をしている癖に。寝転んだまま、鷹野はつぶやく。くつたりとして起き上がれない。

「えい」

頬を叩いたりつねったりしても、とろんと濁ったような目でこちらを見ているだけだった。

「仕方ないですね」

微笑んで、立ち上がった。しばらく寝かせておこうと思った。

と、指先を掴まれる。

焦点の合わないままの目で、見つめられた。鷹野は何も言わない。

「……」

彼女らしくないと思った。そんな風に梨花へすがるのは、鷹野じゃない。

「どうしたの、鷹野」

「……なんでも無いわ」

指先が、離れた。だからと力の抜けた身体に、寒いだろう、とせめてシートだけ掛けてやった。

「優しいのね」

無表情に鷹野は言った。

「別に」

無性に照れてしまって、目をそらして、乱暴に扉を閉めた。

# おとなびた指 ／ ひからびた心

いつからこんな気持ちを抱くようになったのか鷹野には分からない。まるつきり子供の細い短い指で触れられるごとに下腹が熔ける感覚がこみ上げてくる。はらわたごと裂かれるように激しくかき混ぜられて、その快楽はこらえようもない。誰に聞かれてもかまわないと思うぐらい、大きく声を上げてよがってしまふ。

「えっちな鷹野も、可愛かったですよ」

いたずらめいた顔を浮かべてそう言う梨花の視線はひどく無邪気に見えて、それだけで下腹がうずいた。さっきまで悦ばされていたのに、まだ足りないらしい。そのくせ身体のどこにも力が入らない。心は渴いているのに、身体は潤っている。矛盾している。

梨花は時々、どこを見ているのかわからないよううつつな視線を投げかけていることがある。二人きりでいるはずなのに、他の誰かを意識しているような、そんなそぶりを見せる。巫女であるからかもしれない。不思議な少女だった。

「鷹野、そろそろ起きないといけないですよ？」

梨花がそう言うのは氣遣うのではなかった。ただ単にからかって遊んでいるだけに過ぎない。

そう、遊ばれているのは、いつでもこちらの側だった。鷹野の身体が梨花の指を求めてやまないので知っていて、彼女は遊んでいる。そんな彼女を憎らしいと思ひ、同時にどうしようもなく振り向かせたくなる。

いや、そんな単純なことじゃなかった。

誰にも言えないような欲望が鷹野にはある。そ

れを実現することはおそらく出来ない。自分のはらわたを捧げるように抱かれることを望むのはその代わりなのだろうと鷹野は思う。

無邪気な笑みを浮かべた少女に頬をつねられる。その痛みすら奇妙な劣情に変わって行ってしまうて抑えられない。じくじくと下腹部からあふれていく熱さに、頭がぼうつとしていた。

「仕方ないですね」

梨花が立ち上がった。

反射的に指先をつかんでいた。本当の欲望を口に出してしまいそうだった。

もつと、もつと貴女が欲しい。貴女の指が欲しい。貴女の身体が欲しい。自分のはらわたを裂いて取り出してぶちまけて欲しい。指先から私の中にとけ込んで、一つのものに、同じ一つのものになりたい。

「……どうしたの、鷹野」

不審そうな顔で見られた。はつとする。

「なんでもないわ」

そう言つて、力を抜いた。離れた指先の細さにまだ、時は来ないのだと思ひ知らされる。

梨花、もつと太るといい。もつと育つといい。

お菓子の家で、獲物を太らせる老女。

それは鷹野自身のことだ。

おとぎ話の悪い魔女のように、子供をたぶらかして食べようとする（二重の意味で！）

問題は多分、子供は遊び相手が魔女なのだと気付いていないということと、下手をすれば食われるのは魔女の方だと言うこと。

梨花の身体に溺れそうな自分に違和感を覚えないうわけではない。小さなふくふくとした手の平と、短く細い指のどこに魅力があるのかと冷静に考えるとあきれたくなる。けれどきちんと客観視出来ないほどのめり込んでいるのも事実で、実際のところ、綿でも詰め込んでいるんじゃないかと思うほどに柔らかな子供の肌と、ガラス玉のように澄んで輝く大きな目玉とがすぐそばにあればそれだけで勝手に身体が反応する。統合された一つの個体でなくてもきつと、ぐじゅぐじゅに下半身が濡れてしまうだろう。あるいは、バラしてパンツだけにした方が興奮するかもしれない。くびれない平坦な白い腹を鋭いナイフで割いてまだ湯気の立つはらわたを取り出すところを想像すると、胸の内から感動がこみ上げてくる。芸術的なまでに光沢を持った血の紅。ぞくぞくした。

と、素肌の上にシーツを掛けられる。

「……優しいのね」

丁寧な扱われた途端、不機嫌になった。本当は、その優しさが命取りだと言いたかった。殺すか殺せないか、その瀬戸際で相手に同情するのは間違っている。

何かを勘違いしたのだろう、梨花はかすかに頬を染めて、視線をそらした。

「別に」

そう言い捨てて、乱暴に扉を閉めた彼女の背中が小さくてきつとまだ軽い。今なら簡単に抱き上げて、どこか誰もいないところへ攫さらってしまえるだろう。森の中へ、そう、夜の神社の中へ。

……不思議だ。いつかどこかでそんなことをしたような気がする。

思い出の中をざわめく木々が、鷹野を止めようと啼く。おさなごの口を片手で封じて、暴れる小さな腕を壁に押さえつけて、白いうなじを胸の間に挟み込んで、ポケットに入れておいた薬品の染み込んだハンカチを取り出す。がっくりと気を失った彼女の服を一枚一枚ゆっくりと脱がし、そして、お気に入りの宝物で、皮膚を一枚ずつ切り取って、深遠なる紅い淵へ手を入れていく。

まるで、この手でそうしたことがあるかのように、ひどくリアルに思い出される。いつか、どこかで本当にやったことがあるのだろう。夢の中でもパラレルワールドでもなんでも構わない。とにかく、一度か、さもなければ二度か、あるいは数え切れないほどたくさん、彼女を殺した。

けれどまったく後悔していない。むしろ、その瞬間が待ち遠しくて仕方がなかった。自分は狂っているのかもしれない。それでも構わない。だって、誰かから見た他の誰かは狂っているのだ。人と人が理解し得ない生き物であることは初めから分かっていた。分かりすぎるぐらいに分かっているのだ。雛見沢症候群を研究する者ならきつと誰でも知っている。人はあまりにも簡単に狂い、たやすく誰かの心をわしづかみにして、壊す。鷹野の心がまだ壊れずに、ただ老婆のごとくしわだらけになっているだけなのは、寸前で逃げ出すことが出来たからに過ぎない。やるべきことに会えるのが少しでも遅れたなら、きつと壊れていたに

違うない。

だから、来るべき時のことを想う。自分のやるべきことを想う。

神具で開けた彼女の傷口の中にびじびじと指を食い込ませて、ゆつくりと弾力のある腸を引きずり出し、ぬくもりの残った血塊へほおずりをする。そうして、そつとささやくのだ。

——やつと本当のあなたに、会えたわ。

自分の想像にぶるりと震えた。おぞましさではなく、歓喜の震えだった。

ゆつくりと身を起こして、服を身にまとう。このんびりしてはいられない。その日が着実に来るまで、精一杯努力しなければならぬ。

舌なめずりをする。ガラス窓に映った自分の唇は不自然なほど紅かった。

「たかのー？ お客さん待ってるですよ」

扉の向こう側から無邪気に呼ぶ声が聞こえる。

「今、行くわ。待ってて」

自分の声が緩やかに弾んでいるのが分かる。

皮一枚へだててただ一緒にいるだけで、こんなにも心が弾むのだ。もつと距離が近づけば、どれほどの心地よさだろうか。皮膚を切り裂いて、神の住まう巫女の美しい内側を覗く。そうして溢れ出す鮮血をひからびた心に染み込ませる。

その日が来るまでただひたすらに、鷹野は彼女の愛らしい姿をまぶたに焼き付けるつもりだった。